

I - 1 Castigliano の仕事式における要注意点について

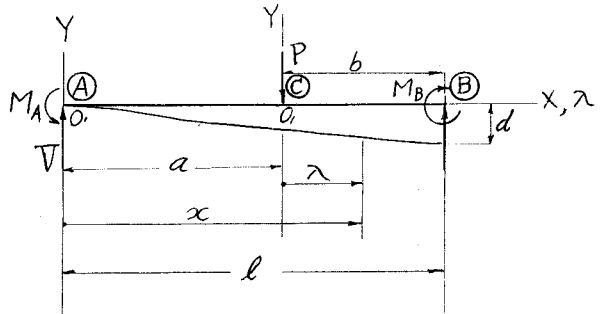
極東設計事務所 正員 石川 時信

要旨 カスチリアノの仕事式は古くから、

i 弾性体に働く外力が、これに弾性変形を与える場合に、外力の方向に起る変位は、その弾性体内部になされた内部仕事を、その外力について一回微分したものに等しい。

ii その体自身が仕事をなせざる

如くに選ばれる非静定力について、その内部仕事を一回微分したものは零に等しい。
 というように伝え教えられる、それを図示の記号に従い、式によりて書けば、



$$\left\{ \begin{array}{l} \frac{\partial W}{\partial V} = \int_0^l \frac{M}{EI} \frac{\partial M}{\partial V} dx = d \quad \dots \dots \dots (1) \\ \frac{\partial W}{\partial M_A} = \int_0^l \frac{M}{EI} \frac{\partial M}{\partial M_A} dx = 0 \quad \dots \dots \dots (2) \end{array} \right.$$

ただし、Eは弾性係数、Iは断面二次率。となれば、その表現は誤謬に陥り易く、寧ろ、梁に関するモールの法則の一面として表現しておく方がよいと述べたものがある。

表現文字について

前掲 (i) 中における、^定 静力とゆう字は、式 (2) においては、 M_A のことにして、この文字は力にあらずして、曲げであり、若し、 $X_1, X_2, X_3, \dots$ とゆうように只外力として表現すると大なる誤謬に陥り易い。なるとなれば、曲げがなす変位は迴転角にして、変位とは性格が異い、梁端條件に合致し難いからである。

偏微分係数が零の場合

前掲 (ii) は、式 (2) と同様迴転角を表はすが、梁端が鉸端の場合は $\frac{\partial M}{\partial M_A} = 0$ で、実際と合はぬ。

このような不合理をなくするに、 $M = M_A + Vx - P\lambda$ とすれば、 $\frac{\partial M}{\partial V} = x$, $\frac{\partial V}{\partial M_A} = -\frac{1}{x}$,
 $\frac{\partial M}{\partial V} \cdot \frac{\partial V}{\partial M_A} = x \cdot (-\frac{1}{x}) = -1$, $\frac{\partial M}{\partial M_A} = \frac{\partial M}{\partial V} \cdot \frac{\partial V}{\partial M_A} = -1$ より、式 (2) は、

$$\frac{\partial W}{\partial M_A} = - \int_0^l \frac{M}{EI} dx \quad \dots \dots \dots (3)$$

となり、梁の微分方程式と一致する。

また、前掲 (i) も $M = M_A + Vx - P\lambda$ とすれば、 $\frac{\partial M}{\partial M_A} = 0$ となり、 $\frac{\partial M}{\partial V} = \frac{\partial M}{\partial M_A} \cdot \frac{\partial M_A}{\partial V} = 0$ 従つて式 (1) も成立しないから、 $M_A + Vx - P\lambda + M_B = 0$, なる静力学的条件式より、 $\frac{\partial M_A}{\partial V} = -\frac{1}{x} (M_A + M_B) + \frac{b}{l} P$ なるものを M の式に代入し、 $M = M_A - \frac{1}{x} (M_A + M_B)x + \frac{b}{l} Px - P\lambda$ より、直接に $\frac{\partial M}{\partial V} = -\frac{1}{x} (M_A + M_B) + \frac{b}{l} P$ と表わす式 (1) に代入すれば、

$$\frac{\partial W}{\partial V} = - \int_0^l \frac{M}{EI} (l-x) dx = - \int_0^l \int_0^x \frac{M}{EI} dx dx = d \quad \dots \dots (4)$$

となり梁の微分方程式と一致する。

以上の様に、カスチリアーの仕事式(1)、(2)は梁の微分方程式(4)、(3)と一致するが、この式(4)、(3)は、図示の通り梁の両端には部材端角 θ_A, θ_B は共に0にして、また、梁の左端(A)には変位のない場合であつたが、もし、変位 d_A, d_B があつた、かつ、部材端角 θ_A, θ_B があつた場合は、式(13)、(4)は、

$$\left\{ \begin{aligned} \theta_A - \int_0^l \frac{M}{EI} dx &= \theta_B \dots\dots\dots (5), \\ d_A + \theta_A l - \int_0^l \int_0^x \frac{M}{EI} dx dx &= d_B \dots\dots\dots (6) \end{aligned} \right.$$

すなわち、梁の一般微分方程式となり、モールの法則とも一致する。すなわち、カスチリアー式はモールの式の一側を表はしてゐると云える。

カスチリアー式の標準適用^(方法)について

前述の通りカスチリアー式はより適用を一步誤ると全然誤つた結果となるから、次にその標準適用方法を表示し、結果をも併記して、その正しいことを示す。ただし、副座標を用う²⁾。

カスチリアー式標準適用表

諸式 梁端条件	曲げモーメント式	偏微分係数	積分結果	結果
	$M = VX - Pa$ $M = \frac{M_B}{l}x + P(\frac{b}{l}x)$	$\frac{\partial M}{\partial M_A} = 0$ $\frac{\partial M}{\partial V} = x = a + \lambda$	$\theta_A - 0 = \theta_B$ $d_A + \theta_A l - \left\{ \frac{1}{3} \frac{M_B}{EI} l^2 - \frac{1}{6} \frac{Pab}{EI} (l+b) \right\} = d_B$	$M_B = \frac{EI}{l} (3\theta_B - 3R) + \frac{Pab}{l^2} (l+a)$ $R = (d_B - d_A)/l$
	$M = M_A + VX - Pa$ $M = \frac{M_A}{l}(l-x) - \frac{M_B}{l}x + P(\frac{b}{l}(l-x))$ $M = -V(l-x) - \frac{M_B}{l}(l-x) + P(\frac{b}{l}(l-x))$	$\frac{\partial M}{\partial M_A} = -1$ $\frac{\partial M}{\partial V} = -(l-x)$ $\frac{\partial M}{\partial V} = -(b-\lambda)$	$\theta_A - \left(\frac{1}{2} \frac{M_A}{EI} l - \frac{1}{2} \frac{M_B}{EI} l + \frac{1}{2} \frac{Pab}{EI} \right) = \theta_B$ $d_A + \theta_A l - \left\{ \frac{1}{3} \frac{M_A}{EI} l^2 - \frac{1}{6} \frac{M_B}{EI} l^2 + \frac{Pab}{6EI} (l+b) \right\} = d_B$	$M_A = \frac{2EI}{l} (2\theta_A + \theta_B - 3R) - \frac{Pab^2}{l^2}$ $M_B = \frac{2EI}{l} (2\theta_B + \theta_A - 3R) + \frac{Pa^2b}{l^2}$ $R = (d_B - d_A)/l$
	$M = M_A + VX - Pa$ $M = \frac{M_A}{l}(l-x) + P(\frac{b}{l}(l-x))$ $M = -V(l-x) + P(\frac{b}{l}(l-x))$	$\frac{\partial M}{\partial V} = -(l-x)$ $\frac{\partial M}{\partial V} = -(b-\lambda)$	$d_A + \theta_A l - \left\{ \frac{1}{3} \frac{M_A}{EI} l^2 - \frac{1}{6} \frac{Pab}{EI} (l+b) \right\} = d_B$	$M_A = \frac{EI}{l} (3\theta_A - 3R) - \frac{Pab}{l^2} (l+b)$ $R = (d_B - d_A)/l$

むしろ、カスチリアーの仕事式は梁に關するモールの二つの法則の一側を云つたもので、その表現方法も充分ではなく、適用上に細心の注意を要す。 参考文献：リ鷹野屋福平：機理論とその応用。 石川時信：副座標による Beam theory について。 土木学会集録 38号 仙他。(講演の時に譲り)